

古典研究とベクトル合成モデル

加藤 周一

1. 思想史における外発的 (extrinsic) 要素と内発的 (intrinsic) 要素

外発的要素 (E) はたとえば外来思想である。内発的要素 (I) は、外来思想が及ぶ時点での受けとり側の思想的条件である。

1-1. 古典の本文は、E と I の相互作用を通じて成立し、その相互作用を表現する。

1-2. E と I は、いずれも方向性をもつ力であるから、二つのベクトルとみなすことができる。その場合に、古典の本文 (T) は、E ベクトルと I ベクトルの合成ベクトルである。これが単純なベクトル合成のモデルである。

2. ベクトル合成モデル

2-1. このモデルの効用は二つある。

現存する古典の本文 T があたえられているとき、E ベクトルと I ベクトルの何れか一つを知れば、他を知ることができる。E ベクトルと I ベクトルの双方が知られている場合には、他の条件を考慮しながら来るべき合成ベクトルを予想することができる (たとえば外来思想の domestication の方向)。

2-2. ベクトルの“力”の大きさを知ることは、多くの場合に困難である。しかし少なくともあるばあいには、力の大小を比較することはできる。

2-2-1. 思想のベクトルの“力”は、説得力・影響力である。たとえば E ベクトルの力は、受け入れ側の社会の支配者層 (または知識層) において、大衆 (または被支配層) においてよりも、大きいことが多い (例: アスカ・ナラ朝の仏教)。しかし、常にではない (大衆文化とマスメディアの条件)。またたとえば、思想が物理的支配と共に入って来る場合には、一般に物理的な支配を伴わない場合よりも、大きな力を示す (例: 朝鮮半島と日本における儒教の影響力の対比)。もちろん外来思想そのものの性質にもよる (その普遍性と排他性)。

2-3. ベクトルの“方向”は、適当な座標軸を択べば、明示することができる。単純な二次元モデルの場合には、二つの対立する概念を組み合せれば足りる。その組み合

せが“適当”であるかないかは、E 要素と I 要素の相互作用の分析に、どの程度まで役立つかによる。

2-3-1. 例: 日本の古典の成立に、広く深い影響をあたえた大乘仏教と儒教の体系について、その世界観 (または価値観)、E ベクトルの方向を、日本側の条件、I ベクトルの方向と対比する場合。そのとき、世界観の超越性に注目して、彼岸性と此岸性の二つの次元を考えることができる。また世界観の包括性に注意すれば、全体と部分への志向を対比させることができる。全体志向と部分志向を、社会から空間に移せば、公私の領域 (への関心) の対比となろう。時間についてみれば、時の流れの全体のなかで、部分は“今”である。空間についてみれば、開かれた空間の全体のなかで、部分は“ここ”である。強い部分的志向は“今・ここ”志向でもある。“今・ここ”は此岸性の極点とも考えられるから、彼岸と此岸、全体と部分の決定する二つの平価は、相互に関係し、相互に重なるところがある。

2-3-2. 大乘仏教には強い彼岸性があるが (E1 ベクトル)、日本の古典の本文 (たとえば仏教説話集) にあらわれた仏教 (T1 ベクトル) には弱い彼岸性と強い此岸性の傾向がある。T1 ベクトルのもう一つの成分を I1 ベクトルとすれば、その方向はきわめて強い此岸性を特徴するものでなければならない。

同じことは徳川時代における朱子学についてもいえる。朱子学は高度に包括的な形而上学体系であるが (E2 ベクトル)、徳川時代の古典では次第にその包括性を失う (T2 ベクトル)。全体志向から部分志向への移行は、宋学の日本化 (domestication) の著しい特徴の一つである。その移行を作りだした力 (I2 ベクトル) の方向は、したがって、強い部分志向である。部分志向は此岸志向の一つの形態とも考えられるから、I1 および I2 ベクトルの方向が一致する。別の言葉でいえば、古典研究を通して、われわれは異なる時期に、異なる外来思想の日本化を作りだした内発的力の方向を知ることができる。

2-3-3. かくして得られた内発的力の方向は、時代と共に変るものかどうか、仏教と儒教 (殊に朱子学) の“日本化”過程の分析は、それが容易に変わらぬことを示唆する。

それをより確かな推測にするためには、分析の対象をふやす他はない。

もし変らなければ、将来の予測が可能である。もし変るとすれば、おそらく大きな社会的変化は、多かれ少かれ、内発的な思想的ちからの変化をも生み出さるうが将来の予測はできない。

3. 古典の範囲とベクトル合成モデル

“古典”の範囲は、文献のみならず、美術史上の造形的な作品までも含めて考えることができる。そこでも外発的要素と内発的要素との相互作用を分析するために、ベクトル合成モデルの有効なことがある。また文献的古典の場合にも、その思想的内容についてだけではなく、叙述の形式について、E およびI ベクトルの合成を考えられる場合がある。

3-1. たとえば建築の平面図と都市計画について、左右相称性 (symmetry) と非相称性 (asymmetry) を標準とすれば、中国文化の相称性へ向う強い傾向と、日本文化の非相称性へ向う傾向との、日本における共存と相互作用を分析することができるだろう。左右相称性は、建物や都市の“全体”の構造に係るから、“部分”に注意を集中する文化のなかでは成立し難い。その意味で、空間の視覚的秩序は、思想史における全体一部分志向の構造に反映する。

(例：大陸からの影響の強い仏教寺院と、その影響のほとんどない17世紀の武家屋敷の対照)

3-2. 日本語の抒情詩の歴史に、形式については短詩型へ向い、題材については公的領域 (殊に政治) よりも次第に私的領域に集中して行く著しい傾向がある。その傾向を生みだした力を、中国の詩の伝統 (E ベクトル) に対立するI ベクトルと考えることができる。

古典中国語を用いて徳川時代の日本の詩人たちが作った多数の抒情詩 (いわゆる“漢詩”) の発展についても、日本語の抒情詩の場合と同じ傾向がみられるから、同じ方向をもつI ベクトルのはたらきを推測できるだろう。

かくして抒情詩に歴史におけるI ベクトルの方向は、思想史におけるI ベクトルの方向と一致する。短詩型は詩人の“今”に集中し、題材の私的領域は詩人の“ここ”の強調だからである。

3-3. 思想史における外来思想のdomestication過程の力学的モデルは、広義の古典 抒情詩から建築を通して信仰体系まで の形成および内容に関しても、有効なモデルであり得る。個別の古典研究から、さかのぼって一般に日本文化の基本的な傾向を明かにするためにも役立つのである。

加藤周一先生のベクトル論を敷衍する形で話を始めることにしますと、古典研究は、いうまでもなく古典のテキストを直接の対象として行なわれます。研究者はまず合成ベクトルTに眼を向け、次いでIベクトル・Eベクトルの方向に注意を払うこととなりますが、個々の研究者の関心のありかたしだいで、I・Eへの注意力は強くも弱くもなります。つまりI・Eベクトルにはたらく力の大きさは必ずしもバランスがとれていません。

たとえば、日本における仏教説話文学といった研究領域を想定してみると、加藤モデルはきわめて有効に作用するでしょう。外来思想としての仏教 (日本の場合、インド仏教そのものではなく、多くは中国仏教) と、それを受容した、たとえば平安時代の仏教観の総合的解析を行う場の中で、たとえば『日本霊異記』なり、『今昔物語』なりの作品の理解が、単にテキストそのものだけを対象とする方法よりも、より円満な成果を期待できるにちがいないからです。

だが、この「単純なベクトル合成のモデル」でストレートに処理できるケースは、おそらく限られたものになるでしょう。たとえば、外来思想という外発的な要因を、きわめて長い間、仏教思想を唯一の例外として、少なくとも直接的にはほとんど意識してこなかった中国のような、閉ざされた巨大な文明圏を想定する際には、ベクトルのとりかた自体が、日本の場合とは大きく違ったものになってくると予想されます。一方、日本のように文明の成立以来、不断に中国文明という外発的な要因 (よりマイナーだが重要な要因としては、朝鮮文明) によって、文明のありかたそのものが大きく影響されてきたようなケースを考えるには、かなり有効なモデルといえるのではないのでしょうか。

こうした問題に関しては、もっと詳しく加藤先生のお考えをうかがいたいところですが、とかく自己完結的になりやすい古典研究の一般的な状況に鑑みれば、この問題提起は大きな意味があると思います。以下は、加藤先生の提言に便乗しての個人的な発言になりますが、お許しを願いたいと存じます。

古典研究に限らないことではありますが、近来学問研究の細分化が加速してからは、狭い自分の専門領域に閉じこもって、自分の研究の周辺で何が行なわれているのか、また自分の研究が大きな一つの領域の中でいかなる位置づけにあり、いかなる存在意義があるのかについて、あまりつきつめて考えようとしないう傾向が広くあるようです。そうした関心のありかたからは、いわば複雑な機械のある部品を精巧に造りだすことはできても、機械そのものを組み立てる方向に眼は向かわず、また機械のメカニズムを高めるために、より精密度の高い部品に改良するという発想も生まれてこないでしょう。

過去の典籍について研究することは、つきつめていえば、過去から未来を貫く人間の生き方、考え方そのものを理解するところに究極の目的が存するはずですから、個別的にどこまでそれが達成可能かはひとまず別として、そうした大きな

目的意識を多少とも常に心がけておくことは、個人の研究の性質自体にも必ずや影響をもたらさずにはおかないでしょう。失われつつある個別から全体への眼を取り戻すことによって、古典研究の意義に格段の重み加わるにちがいありません。

加藤先生の提言にも示唆されていますが、古典ことに外国の古典を対象とする研究においては、当のテキストを含む外国の文明と自国の文明との相対化を心がけることが欠かせません。この点について、私の専門分野である中国古典学から一つの具体的な事例を挙げて、ご参考に供したいと思います。

明治時代の初期から中期にかけて、西洋の先進文明の成果を輸入するために、人文・社会科学から自然科学までのあらゆる分野において、外国語の訳語として漢語がひんぱんに用いられました。それにはそれなりの正当な理由があるわけで、まず和語は多音節で、それらを組み合わせて新しい語彙を造るには不便です。それに対して、漢字は一字一音節で、一つのあるまとまった概念を表わします。また漢字の特色として、強い意味喚起力があり、大きな造語力を持っています。しかも、明治初期に支配者階層に組み込まれた人々の教養が、漢学に基礎を置くものだったことも大いにあずかっていました。

新しい漢語の増加に伴って、一般庶民の言語生活にも、漢語が大いに取り入れられるようになりました。石井研堂『明治事物起源』人事部に、「漢語の流行」なる一項があって、次のようにいっています。「明治維新後、日常の会話に、漢語を使ふことの大流行を見しは、奇妙なる現象なり。思ふに、これ維新の風雲に際会してにはかに抬頭せる官吏は、多く月落日暮の書生畑より出でし人々であり、その人々の使用語が、優越的標準と認められ、それを真似るのが天下一般の維新色を發揮せしにあらざるか」。

現在なお一般に用いられる漢語を充てた訳語には、当時の人の手になるものが多くあります。有名な例では、「文学」「哲学」は西周、「演説」は福沢諭吉、「郵便」は前島密といった維新期の人による造語とされています。「汽船」「汽車」等に用いられる「汽」の字も、steamの訳語として、福沢諭吉が取り入れたものです。これらの人々に共通するのは、洋学を治める一方で、深い漢学の素養があったことです。

『西国立志編』(S・スマイルズSelf Helpの訳)の訳者として知られる中村正直は、「漢学不可廃論」(明治二十年、加藤周一・前田愛編『日本近代思想大系・文体』所収)でいっています。「今日洋学生徒ノ森然トシテ頭角ヲ挺ンデ前途万里ト望ヲ属セラルル者ヲ觀ルニ皆漢学ノ下地アル者ナリ。漢学ニ長ジ詩文ヲモ能クスル者ハ、英学ニ於テモ亦非常ニ長進シ英文ヲ能シ、同儕ヲ圧倒セリ」。また彼は、ロンドンの留学から帰国後、自分の子どもたちに、「漢学ヲ廃シテ専ラ英学ヲナサシメ」、初めのうちは学業が進んだものの、むつかしい個所にさしかかると、進歩が止まってしまったと慨嘆し、「予是ニ於テ漢学ヲ廃セシメタルコトヲ悔ユ」と告白しています。

その一方で、漢学は新しい時代に迂遠なものとして、その影響力を弱めつつありました。これも『明治事物起源』教育學術部によれば、明治二年、前島密は、「漢学を廃して、仮名を一定の国字とし、国文を定むべき建白書」を出しています。これはもちろん極論であり、江戸から明治にかけての漢

学は、長い蓄積の上に立って、その学問的水準に関していえば、有史以来最も高いレベルにありました。漢詩文の創作能力も同断です。しかし、いかんせん、漢学は閉ざされた自己完結の世界に逼塞していました。

ジュール・ヴェルヌの翻訳者として著名な森田思軒の「我邦に於る漢学の現在及び将来」(明治二十四年、同上書所収)には、当時漢学者の最高峰であった安井息軒が、republicの訳語に「共和」の語が充てられているのを批判して、「(周代に天子不在のため)諸大名協議して政事をなせし権宜の計」を「常計とするは心得ず」といったことを取り上げ、「レバブリックを論ずるに周の共和を援かるは、内の女房を叱るに隣家の細君をなぐるよりも甚し」と皮肉っています。もし訳語の当否の議論であれば、息軒の説も一理あるところでしょうが、「共和」の語の来歴を以て「共和制」の本質的な是非にすりかえた(あるいは誤解した)ところが、時代錯誤とされたのです。(なお、大槻文彦『大言海』によれば、「共和」の訳語は、弘化二年(1845)に、箕作省吾が蘭書を訳して『坤輿図識』を作るに際して、漢学者で文彦の父の大槻磐溪の助言により、北米合衆国を共和政治州とした由)

伊藤仁斎や荻生徂徠のようなとびぬけた儒者はともかく、江戸時代のごく一般の儒者にとって、唐土は聖人の国であり、四書五経は聖人の教えとして絶対的な存在でした。有名な江戸小咄にこういうのがあります。ある儒者が品川に引越しました。弟子どもがその祝いに赴いて、尋ねますには、「あのにぎやかな日本橋を見捨てて、このへんびな品川へ越されたは、何かお考えあつてのことですか」。儒者したり顔に、「唐へ二里近い」。

また、孔子を大将に、孟子を副将とする唐土の軍勢が攻め寄せてきたら、戦うべきか、降参すべきかというような議論をして、儒者が頭を悩ませたという話もあります。いずれも文献上の中国を絶対的な規準とする自己完結的な狭い見の力カチュアになっています。

儒者は、漢籍という世界(それは本来、中国という外国の典籍だったのだが)に閉じこもっていたから、自分の思考を対象化するすべがありませんでした。他方、洋学者は、洋学の知識を自己の文明に同定化するために漢学の知識を使ったのです。

漢籍の読解力の水準は、明治以来、日に下る状況で低下していますが、かつて漢籍に自己を同定化した趨勢はいまや雲散霧消して、四書五経を含めた中国の典籍は、それらを中国語で書かれた異国の文献として対象化する態度が一般になっています。読解力の低下はともかくも、この態度そのものはプラスの要因として肯定してよいでしょう。二十一世紀にさしかかった中国古典研究は、この実態を正面から受けとめながら、新たな方向を模索する必要があると、私自身は考えています。